萬葉拾穂抄　一之下

明日香清御原天皇
下の河よるし
天渟中原瀛真人
天武天皇乃御諱也
明日香宮ハ天武のおはし
十市皇女　注り表
波多横山　伊勢に出る
乃南のかたなり
吹芡刀自　イ吹黄刀自
女乃名也　傳未詳なり
河上のゆつ乃その村よ
河上湯都盤村ならむ
のちと山のあたりや岩白
草むさずハ不生也被
村乃名にも生するの
ごとく我も常ゐとと

明日香清御原天皇御宇　天渟中原瀛真人天皇号
大海皇子謚曰天武天皇明日香宮大
和國高市郡今ノ島ノ宮正東地是也
十市皇女参赴於伊勢神宮時見
波多横山巌作歌一首　紀曰天皇四年乙亥
春二月乙亥朔丁亥十市皇女阿
閉皇女参赴於伊勢神宮十市皇
女ハ天武天皇第五女母ハ額田姫王也
阿閉皇女ハ是
元明天皇ゝ　吹芡刀自　黄イ　未詳
河上乃湯都盤村ニ草武尼受
常冊毛冀名常處女煮手
河かみ乃ゆつ乃いはむらに草むさず
つねにもかもなとこをとめにて

万下口卅二

乙女そ君かゆつ人とせ
異或説湯都盤村也
をゆつはしらと訓してゆ
つハ五百津に日本紀五百津
磐村と同じ名の多きと云
此名なし或説に
河上乃ゆつの村の磐根
下草ふみて常に落ん
ますゆつハと注りてある
後人依歌辞して麻績王ハ
此伊良胡國
うつおさを乃をおほきみ
誠うつそをハ打麻をかむる
和乃時にしも麻乃
なうこいふ和く傍の尺
安云あまのそうむと

麻績王流伊勢國伊良虞島時
人哀傷作歌一首　日本紀曰天皇四年乙亥夏四
月戊戌朔乙卯三位麻績王有
罪流于因幡一子ハ流伊豆島一
子ハ流血鹿島也是云配于伊勢
國伊良虞島者疑後人依歌辞
而誤記乎　作者未詳
打麻乎麻績　白水郎有哉
射等籠荷四間乃珠藻刈麻須
うつそををみのおほきみあまなれや
いらこのしまのたまもかります

つくさし玉東 神津か
小ハうめるをいふ名也とぞ
麻續乃配流に逢
又祇洹 神津村ニ玉藻
かりてくらふこゝろ
此字を昭明ハ刈り取
彼王乃靈のなきまゝ
やつれしと憐みしも
うつせみ乃いのちを
空蟬ハかなしき身
と云ハかなきうきめをみん
よりハとく死ぬへき身
乃かなしき命を惜み
あま人て浪にぬれつゝ玉
ものかりてはむと歌ひ
みよしのみゝがの嶺

感傷之和歌一首

麻續王

空蟬之命乎惜美浪尓所湿伊良虞能島之玉藻苅食

うつせみの、いのちをおしみなみにぬれいらごのしまのたまもかりはむ

一首　天皇御製

三吉野之耳我嶺尓時無曽雪者落家留間無曽雨者零計類其雪乃時無如其雨乃間無如隈毛不落思作叙來其山道乎

みよしのゝみゝがのみねにときなくぞゆきはふりけるまなくぞあめはふりけるそのゆきのときなきがごとそのあめのまなきがごとくまもおちずおもひつゝぞくるそのやまみちを

一云三芳野之耳我山尓時自久曽雪者落等言無間曽雨者落等言其雪不時如其雨無間如隈毛不墮思作叙來其山道乎

みよしのゝみゝがのやまにときじくぞゆきはふるといふまなくぞあめはふるといふそのゆきのときじくがごとそのあめのまなきがごとくまもおちずおもひつゝぞくるそのやまみちを

年ひらすとハ余ハ
ありしこれを思ひ合す
こハみよしのにておもね
る事かなしといふ心
ふかく隠れしこのおは
すみまへをさして云
てこれをとくもとし
日本紀に天武紀に天武
ハ天智乃御弟にて春
宮たりし時天智乃御子大友皇子を位にたてむ
とおぼしけり天智乃御病おもくなりて大友
御心よせのありけり天智乃病重くなりて蘇我
乃臣安麻侶して我へゆづらんとすると天武
多病なれハ位にえつかじとて智乃御をいなみて
吉野へのがれ給ひて出家して大友をたすけ
位にたてさせ給ひしかば世に吉野へのがれ給ふ
をたすけ出世させのがれし彼より野へおりゐ給ふ

事とせさし侍るよし此歌雷乃事をしゝその流ゆる部よ歌ひ傳るや
一云 是ハ此哥乃異説あるを注せる也 一本右句〻相換因此重載焉
時じくそ 仙曰志く八志けきこ時じくとハ時ならずといふ也 日本紀第六云
非時香菓をときじくのかくのこのみと 下にも雪乃時なきかごとくよめり時なくおちくる雪
このみ泉 玉東時じく八時をわけず雪ふる也 下に時ならぬとあるも
まゝ時なく雨ふる也 時不雨るところも折りさけ 志ゆふ
かつらぎ山小ふる雪のまなく時なく吾がゆく心を 集ふりよめる
あくる此へし此歌ともめのまゝに何ハかりくれとも御ハ同し

紀曰 日本書紀二十九巻
天皇 天武也 是御遷と
ひしろせすもとのちれ
八年こかゝり泊乃日本
紀よそ知つし始めの御
哥にもよろし 彼幾
おいせし時と知つし
よき人乃よしとよく

幸吉野宮時御歌一首 紀曰八年己卯
五月庚辰朔甲申幸吉野宮

天皇御製

淑人乃良跡吉見而好常言師
芳野吉見与良人四来三

よき人乃よしとよくみてよしといひし
よしのよくみよよき人よきみ

よしとよくみて言ひ追し
藤原宮 袋草子曰持統
天皇高天原廣野姫也
御以手あそ

藤原宮御宇高天原廣野姫天皇 謚曰持統天皇元年丁亥十一年譲位軽太子尊号曰太上天皇

天皇御製 一首

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

はるすぎてなつきたるらししろたへの
ころもほしたりあめのかぐやま

新古今百人一首詠歌
大概 衣ほすてふとあるを
春ハ霞めるの首夜小如
て此山乃明白小見ゆ
るを白妙の衣ほすとしるしたるとの説をさしていはれ日本
香久山ハ持統帝乃離宮とそ 集二見ゆ
初めて此よしかく山乃
甘橿明神とて
神ぬりかして
ことは

近江荒都 志賀旧都也

過近江荒都時作歌一首并短

万下廿五

口訣
たまだすきうねびは
仙回を八田をすゝ池ゝ畝
火山といふ也よめる畝
耕る人をかゝる田に畝は
その故也玉は物をかける
延順和名云諸田廣一歩
長二百四十歩為畝 詞林
うねびの山 大和日本紀
ひじりのひじりは天下を治
める世を曰 仙曰 神武天
皇をまうしあらはしてまつりし
めでたく觀夫畝 畝字
傍山東南橿原地者
蓋國之墺區乎可治之
是月即命有司經始

歌

柿本朝臣人麿

玉手次 畝火之山乃 橿原乃
たまだすき うねびのやまの かしはらの
日知之御世従 阿礼座師
ひじりのみよゆ 一云自宮 あれましし
神之書 樛木乃 弥継嗣尒
かみのことごと つがのきの いやつぎつぎに
天下 所知食之乎 一云食来
あめのした しろしめししを 一云めしける
天尒満 倭乎置而 青丹吉
そらにみつ やまとをおきて あをによし
平山乎超 一云 見
ならやまをこえ 一云 倭乎置 青丹吉 平山越而
やまとをおきて あをによし ならやまこえて
何方 御念食可 一云 所念計米可
いかさまに おもほしめせか 一云 おもほしけめか
天離 夷者雖有 石
あまざかる ひなにはあれど いはばしる
走 淡海國乃 樂浪乃
あふみのくにの ささなみの
大津宮尒 天下 所知食
おほつのみやに あめのした しろしめし
兼 天皇 神之御言能 大
けむ すめろぎの かみのみことの おほ
宮者 此間等雖聞 大殿者
みやは ここときけども おほとのは
此間等雖云 春草之 茂生
ここといへども はるくさの しげくおひ
有 霞立 春日之霧流
たる かすみたつ はるひのきれる
一云 霞立 春日香霧流 夏草香 繁成奴留
一云 かすみたつ はるひかきれる なつくさか しげくなりぬる
百磯城之大宮處 見者
ももしきの おほみやところ みれば
悲毛 一云 見者左夫思毛
かなしも 一云 みればさぶしも

帝宅 書本紀に見ゆ あらはし
たてしみよは 神武をましまし
日本紀三又曰 畝傍之橿
原也 太立宮柱於底
磐之根
あまおろし、仙曰 むま
れましますといへり 延
阿礼は生也 字形の字し
續日本紀一 文武天皇
詔曰 天皇御子之阿
礼坐牟弥継継尒 大
八嶋將知 とこれと同
そは綏靖天皇 安寧
天皇 懿徳 仁天皇 景
行天皇 まして まつる

宮 神武天皇都也 大津宮 天智天皇都也 橿原

かくれにし皆やまとの国に卿しおもほしまし〳〵けるといへるにて
神乃御わざにてこの乃本 仙曰神ハおもほしあやしきことをとりかへしおもはれ
ハ足安云ことの意ハやまときこしめすとハ哉と流来しハさすなれバ
ならの川やまとをはなれて 天離をさしたまひて天智乃近江乃
おはせしまし 仙曰ひなえたるをさかるを云日乃字をいへるにて
ひなさかりをはなれし 月ハ地時に離るをさかりて乃なりし 君臣離散さかる
ならしるあふみの国 仙曰淡海といふかにそふての湖の水流走る心の枕詞
乃ちなみ乃大はの意 天智乃内裏と近江乃志賀にて天下を治在
あひし〳〵日本紀廿七日 六年三月辛酉朔己卯遷都于近江乃波
なみに限す近江乃枕詞し或ハ天智帝志賀に崇福寺を建立
乃時仙人来て古仙霊崛伏蔵地佐々名実長等山といひしより乃
故しとて此寺を童蒙抄にハ崇福寺縁起よりいへりといへり 袖中抄詞林采
りハ日本紀よりいへりと日本紀よりハみえしと ふ寄るなり
すめろぎ乃神の尊とハ 天子乃御ことを貴みて神の尊とよみけり
おほひきみ乃御世よりおほしまし〳〵し神のみことといひけれし 代々の帝の世
出させ給へるといふなり 大宮ハ 大殿ハ皆天智帝の大殿と

なる日乃きれる 是ハきるゝと云こゝは草繁く日霞て茫々たる意
一云かすみたつ春日かきれる もゝしきの
こゝしきし乃おほみやところ 仙曰大内ハ百官乃直廬乃屋舎あまたなれ
こゝしきことハ
さみしと さびしきし
乃なみ乃しがのからさきを
さきく 幸(サキク)天智の都をまさき
なる都の時乃しれど今古
京と成てまゝ人ゝし来る
ねハ舟待かねつとし
さゝなみのしがの大わだ
志我大海(ノおほわだ) 近江乃湖也
湖乃の水ハ淀むとも
ゑとも 百乃卿人ゝ文
雖逢(あはめ)やも 一云あはめやも

反歌

樂浪之 思賀乃辛崎 雖有幸 古本凡侍
さゞなみのしがのからさき さきくあれど(さちハあれど)
大宮人之 船麻知兼津
おほみやびとの ふねまちかねつ
左散難彌乃 志我能 一云比良乃 大和太
さゝなみの しがの 一云ひらの おほわだ
與杼六友 昔 人二亦母
よどむとも むかしのひとに
相目八毛 一云將會跡母戸八
あはめやも 一云あはんともへや

高市古人(タカイチノフルヒト) 感傷(カマシミ)近江舊都(フルキミヤコ)ヲ作歌二首 一云高市連(ムラジ)黒人

かゝる人に我おとらめや
古き物ハ哀を求てなき
と惜む我名も古人の古
き事あれハ一入旅寝の
感傷深き哥なり
此哥の心ハ古昔乃
地祇ハ己か守ミし所に

古 人爾 和礼 有哉 樂浪乃
いにしへのひとにわれあれやさゝなみの

故 京乎 見者 悲寸
ふるきみやこをみれはかなしき

樂浪乃 國都美神乃 浦佐備而
さゝなみのくにつみかみのうらさひて

荒有京 見者悲毛 或作毛
あれたるみやこみれはかなしも

御神と八天智帝を讃まつるや人丸の古哥にも天皇乃神の御子とも讃り
万葉集の哥多し此舟ハりて後法性寺殿
御歌して古き都の月独すむらんといふ哥を詞林采葉の山井乃正保にみ
ゆ山王七社乃内にも大宮二宮乃神ましますと申す
ハ後代乃事なれハさも有へし万葉ハ延暦以前の日吉とも称れける
事の事なれハ此集の哥をもて考へて知るへし

川島皇子 紹運録云
天智乃御子 母色夫古娘
贈浄廣一 浄大参とも

幸二紀伊國一時御作歌一首 日本紀曰朱鳥四年庚
寅秋九月天
皇幸紀伊國 川島皇子 一云山上臣憶良

白浪乃 濱松之枝乃 手向草
しらなみのはまゝつかえのたむけくさ

幾代左右二賀 年乃經去良武
いくよまてにかとしのへぬらん

一云 年者經尓計武
一云としハへにけん

注日本紀ハ卅巻持統記
しらなみの濱松か枝の手向草とハ
白浪よする濱の濱松と
いふ也手向草ハ一条禅
閣乃哥林良材云只手向
こゝろこころ松か枝も結ひ手向なと
祇園神にも手向る松か枝に結ふといふ事ありて濱松の枝の手向草とこそ仙覚
女蘿を注せり是只手向乃説とり古今濱松乃手向草といへりて代々
にいはれんと濱松か

越二勢能山一時御歌一首 阿閇皇女

此也是能 倭尓四手者 我戀流
これやこのやまとにしてハわかこふる

木跡爾有云 名二負勢能山
きちにありといふなにおふせの山

これやこのやまとにしてハ
是やとハ背乃山をさして
いふ也日本をさして我
恋るハ兄をかくいふ也
と背といふ夫といふ名に
付て恋しと讀せ給ふや
やまとハ日本也きちハ紀伊也

幸二吉野宮一時作歌二首并短歌 日本紀曰

日本紀 卅巻也
未知何年月者歟
詳知何月従駕作歌
やすみしる 拾遺云以矣
むかしもしらしいふ御事也
仙曰さいふは何れの年にも只
おほくありしといふ
通じ日本紀 数とよむ
きよきかうち 清き
河乃内といふ也
みところをよし野
御心よくおほしめ思
召し吉野乃枕詞也
花ちるといふ 花散るあ也
又花ちりいはむといふ心也
秋津の野へ 八重粉に 大和

三年己丑正月天皇幸吉野宮八
月幸吉野宮四年庚寅二月幸吉
野宮五月幸吉野宮五年辛卯正
月幸吉野宮四月幸吉野宮未知
何歳月

柿本朝臣人麻呂

八隅知之 吾大王之 所聞食
やすみしる わかおほきみの きこしめす
天下 國者思毛 澤二雖有
あめのしたに くにはしも さはにあれとも
山川之 清河内跡 御心乎 吉
やまかはの きよきかうちと みこころを よし
野乃國之 花散相 秋津乃野邊尓
野乃くにの 花ちらふ あきつの野へに
宮柱 太敷座波 百磯城乃
みやはしら ふとしきませは ももしきの
大宮人者 船並弖 旦川渡
おほみや人は ふねなめて あさかはわたり

集六ニ千よの秋津
乃宮とも
宮柱ふときまします宮柱
太敷立と日本紀中臣
祓ぞよにみゆ 同宮
柱ふとしきておほしきましてと
舟並て 舟を並へてさし渡る舟ぞ
とあるふた事跡の競舟の起
此川乃ゆるすなる 川
ときはの浦の都は 花も
あかぬ 其々の流の文よう流
て下にさそ おかくかけ也
かぎりも 仙曰とも
みぬらしの 何にの只
らすあるといふことを 是
東路をまてらん心乃序

舟競 夕河渡 此川乃
ふなきほひ ゆふかはわたる このかはの
絶事奈久 此山乃 彌高良之
たゆることなく このやまの いやたかからし
珠水 激瀧之宮子波 見礼跡不飽可聞
たまみつ たきのみやこは みれとあかぬかも
舟きほひとは舟競をいふ舟の事也
競舟の起 楚俗不愛力貴勇為競渡 元積事文類聚 にあり
川とも山とも都をいふ事也
花も吉野の事なり 光明峯寺殿月影乃
流の文より秋風ふきて 秘曰此歌乃心
て下にはしるしあり 此歌の文有ることもあるなり

反歌

雖見飽奴 吉野乃河之 常滑乃
みれとあかぬ よしのの河の とこなめの
絶事無久 復還見牟
たゆることなく またかへりみん

まひけし為とし
やすみしるわがおほきみ
是亦二首乃内なり
おなじ歌ハ持統をさし
かむながらハ 仙日本紀廿五ニ
惟神(カミナガラ) 惟神者謂随神道亦自有神道也
かみさびせすと 仙日神さびさ
びすといふ男さび女
さびなどいふにおなじ
たかどの 仙日樓閣也 又
安云内裏をさし
たかしりまして といふ
うしはす也 統知する心
也 中臣祓ニ 高天原ニ
千木高知て と云ニ同
てなれる きうき山

安見知之 吾大王 神長柄
やすみしる わがおほきみ かみながら
神佐備世須登 吉野川 多藝津河内尓
かみさびせすと よしの川 たぎつかうちに
高殿乎 高知座而 上立
たかどのを たかしりまして のぼりたち
國見乎為波 疊有 青垣山 山乃
くにみをすれば たゝなはる あをがき山の
山神乃 奉御調等 春部者
やまつみの まつるみつぎと はるべには
花挿頭持 秋立者 黄葉頭刺理
はなかざしもち 秋たてば もみぢかざせり
一云 黄葉加射之 遊副川之 神母
一云もみぢかざし ゆふかはの かみも
食尓 仕奉等 上瀬尓 鵜川
おほみけに つかへまつると かみつせに うかはを
乎立 下瀬尓 小網刺渡
たて しもつせに さであさしわたし
山川母 依氐奉流 神乃御
やまかはも よりてつかふる かみのみ

仙日たゝなはるとハ吹き
なれりと云 山似屏風
あし云是屏風の如く
たゝなはれるといふ まうき
山ハ宮ハ大和吉野ニ也
又安云青垣ニ青山流
らうる也 山つみハ山祇
たるみかき まつる御調物也 春花秋紅葉も山祇のなす御調物也
ゆふ川 仙日吉野より落る川の名也 一説ニハゆ川と云也 是同 大御
おほみけは 又安云 王乃供御也 日本紀 御食夕食ともいふ也
鵜川をたて 鵜川を立まはして魚をとる也
山川もよりて流ゆる 仙日是ハ上ミにいふつれたる山つみのみつぎと
まつりハ花かさし もみぢ秋そへハ紅葉かざすとて山祇のまつりめくる
なまの御調也 中河の神もおほみけにつかふまつるとて上つ瀬にて鵜川
とゝのへたれハせにさゝれ しもつ瀬にハ河伯のさであみさしわたして
也 是を山河もよりて流ゆるとハよめる也

代 鴨
よかも

反歌

山川毛 因而奉流 神長柄
やまかはも よりてつかふる かみながら
多藝津河内尓 船出為加母
たぎつかうちに ふなでするかも

神乃御代かも　当代をあかむる證しおほきわかおほきみの神なりと云首尾也
やま川もよりてつかふる　吉野宮も山神河神もよりてつかふるさまをよめり
神ながらと云ハ帝をいふ。かゝる帝なれバ此河の内ニ御舟出せさせ給ふといふ
鳴呼見乃うらを
敦隆の類聚万葉八雲
御抄名寄等皆ニハ京
極黄門とよめること和
歌拾遺集ニハとよめ
うしろ仙岳あミと云へ
安ニハとよみ伊勢
こゝに中乃あろむらと
京極黄門ハあミとよ
のこゝろよむ其れ
京わかミひやうけし
よろしき乃よみ
仙田よみのよきハ雨乃名をよみをいふゆへにさちえきのと

幸ニ伊勢國ニ時留京作歌四首

京極黄門ハあみとよめり

嗚呼見乃浦尓　船乗　為良武　㛭嬬等之　珠裳乃須十二　四寶三都良武香

あみのうらに　ふなのりすらん　をとめらが　たまものすそに　しほみつらんか

釧著　手節乃崎二　今毛可母　大宮人之　玉藻苅良武

くしろつく　たふしのさきに　いまもかも　おほみやびとの　たまもかるらん

潮左為二　五十等兒乃島邊　榜船荷　妹乗良六鹿　荒島廻乎

しほさゐに　いらごのしまべ　こぐふねに　いものるらんか　あらきしまわを

とうしきハ助語　山しハとの雅よしと云證とあのふとしいふも同さま
よのふ常釧乃器なれハ釧着乃よみにつけたるしハ字ふ
しの乃さき伊勢ニ仙とのゝみハ一ありし地名を隠伏すれハいふなり
しかさのふいしこの　五十等兒乃潮さハ八雲ニ伊勢ニ在とよさねハ
同抄ニしかさしのふ西しきと仙日しかきしはうき八波あらきりよめ
れらの集ニしかさあの波をうるとこ　才土ト半分乃波の志かさね
潮ひさきすなはちしかさねたく立東ね　玉東ハ五十等兒の島ハ伊勢の
海ニよくなみ立ち志まわハ潮のかかりしありき涌潮ハ潮凡ありて涌ゆるめ
とり紙田しかさき八波ありて舟こあかすれハあらき潮わと
心よしとくおもひやるなかろう

當麻真人麻呂妻作歌

吾勢枯波　何所行良武　已津物　隠乃山乎　今日香越等六

わがせこハ　いづちゆくらん　おきつもの　かくれのやまを　けふかこゆらん

當麻真人麻呂　當麻ハ姓真
人ハ戸麻呂乃名麻呂が
妻の供奉せしハ書紀
ニ見えずのかりて後ニ記也
わがせこハいづちゆくらん
已津物なきハ云ともいへり

幸ニ伊勢國ニ時従駕作歌一首

日本紀曰　朱鳥六年

玉篇ニ已除里切起也ニく
起ヲシキと訓して仙曰おき
流もいかくれゝる起されそれ
ハ沖津藻の隠れ乃山と
つゝく～一此集十一ニおき
まひもをかくすにと讀り
隠れ乃山伊勢之飛同
日本紀 卅巻也 朱鳥天武年号
浄廣肆 天武帝十四年
正月ニ爵位乃号を改
十二階ハ諸王以上の位
ら四十八階ハ諸臣の
位らめてるこを十二階ニ
明位浄位ニいみゆきを
浄位の第四を浄廣二と云
わきもこをいさみの 仙曰いさみ乃山伊勢國之名东 吾妹子をいさみんとおって

壬辰春三月丙寅朔戊辰以浄
廣肆廣瀬王等為留守官於是
中納言三輪朝臣高市麻呂脱
其冠位擎上於朝重諫曰農作
之前車駕未可以動辛未天皇
不従諫遂幸伊勢五月乙丑朔
庚午御阿
胡行宮

石上大臣 麻呂

吾妹子乎去来見乃山乎高三香裳
日本能不所見國遠見可聞
わきもこをいさみのやまをたかみかも
やまとのみえぬくにとほみかも

也去來見山乃こゝろして旅宿大和のみえさる國乃をきき旅中ゝくる
とし伊勢まて旅宿をこひし
わかおもきみのこゝろてる
宍家乃臣之俗臣ゟう
てしまう云之おきまを指絲
とか帆をく照日之皇子
ニ六日並皇子なるを
持統乃うみせまつる
御子のゝ御歳光
えうしを〳〵ゐらみて
よめる詞なると日
並ハ是草壁皇子を
称奉る詞なるひせたま
ちのゝるゝ持統を
きせしと同し心なる
ゆるしけるみやこを

軽皇子宿安騎野時作歌一首并短歌

軽皇子ハ天武天皇孫草壁皇子第二子
文武天皇是也母天智天皇第四女阿
閉皇女元
明天皇也

柿本朝臣人麻呂

八隅知之吾大王高照
日之皇子神長柄神佐備世須登
太敷為京乎置而隠口乃
泊瀬山者真木立荒山路乎

やすみしるわかおほきみのかくてる
日乃わりみこハ神なから神さひせすと
ふとしけるみやこをおきてかくしくの
はつせの山ハまきたてるあらき山みちを

宮柱ふとしき立しまし
をきてしの代し日並
皇子王宮をさしをき
て今のくに隠口之
くらくのはつせ
隠口定家にはく六切
らくとよめり然とも
集十三に己母理久乃
泊瀬とも出日本紀雄
略天皇紀に挙暮利矩能播都制とあれハ仙覚由阿か此隠口をこもりく
のはつせとよむへしといへり但和哥にハこもりくともこもり江とも
くらくとよめり八雲御抄にもくらくのとまり泊江隠江云
此山名をいへる山名乃禁樹をいふとあり叉かつらきてまつ
まつ山阿騎乃野にやとりてと仙曰阿騎野ハ大和吉野の郡にありと云又
武天皇乃文草壁皇子彼の宮のくを思ひてよめるを
移時をえてまた後のあはれをこそとおもへと

名 根 禁 樹 押靡 坂 鳥 乃
いそねのしもとおしなへさかとりの
朝越座而 玉限 夕去来者
あさこえまして玉かきる夕さりくれは
三雪落 阿騎乃大野爾 旗須為寸
みゆきふるあきのおほのにはたすゝき
四能乎押靡 草枕 多日夜
しのをおしなへくさまくらたひやとり
取世須 古昔念而
せすいにしへおもひて

てかりしたる時何せゆゑて此哥有ることなるや彼の
る神風山をさして云ひけるときこえたり坂鳥とハ坂の上より朝に
飛ゆ鳥を云 万葉 坂鳥乃とハ朝とこそいふ白ましとおもはるゝ
夕されなとハタ日乃亀きいゆる心なれハタされハ乃枕詞なるへし
大雪ふる阿騎乃大野 是ハ志のをおしなへと云ひ草枕といふんとて雪路
て此野乃旅籠をとりてたひすといひけるとや詞つゝかひ久牟す
哥仙乃天雉乃おかむるへし大安云石根のしもとハ此の名をとしせく
すゝきとハすゝきとおしなへなれハ此のさつけてしたせ
袖中抄にハ花すゝきとおしなへてとらへるハ童蒙の説一とあれ
旅やとりせす 仙曰旅やとりすとらはせハ詞乃助之 万葉 すの字
すみくよむへしむかしをおもひくといふの草壁乃ほまりを今輕皇子
にて此野に宿り給ひて
かきの大野にやとる旅人
定家つ抄のうたと和し
宗祇本ハ此仙覚
かきのよにむへしと

反歌　短歌

阿騎乃尔 宿 旅 人 打靡
あきのゝにやとるたひ人うちなひき
寐毛 宿良目八方 古 部 念 爾
いもねらめやもいにしへおもふに

然ども定家卿の定家抄本乃説を用ふべしと注せり
やと定家卿乃和に任せ侍は
心もなしやとこそ云哉
八同れ仙旨ちかあひき八
寝るをやすむるを
云ふ也ねるまてやとも
とよめるも玉葉にはねる
めやとは猶義明らし
ますさるかりのはかれと

47 真草刈 荒野者雖有 葉 過去
君之 形見跡 曽來師
まくさかるあれのとはあれともみちはのすきゆく
きみのかたみとあとをそこし

48 東 野 炎 立 所 見而
反 見 者 月 西 渡
あつまののけふりのたてるところみて
かへりみすれは月かたふきぬ

49 日雙斯 皇子 命 乃馬 副 而
御獵 立 師斯 時 者 來 向
ひなみしのみこのみことのうまなへて
みかりたゝしゝときはきむかふ

定家の和に又安云まくさかるとゆくは此乃まくさて又玉葉赫かる荒野はかりてあれと此る
かりされと日並の皇子形見此所となる上り陸皇子ゆきやまのまきし仙旨八まくさ
かるかりの事八あきつる和てまきは蒲しなふ八云の哥に假日並の皇子のかくるかに
成すかれは葉るゆくとよめるも蒲かるかりの荒野より八あれと常ひけり記の事く
かつまのくさかりの今川了俊言塵集云此かつまの野八吉野安騎野の間にある
ところ大和名所の煙のくさかる八まつ野をやし焼ちるへし祇注玉葉云
吉野八吉野かりをかつま板をしてるといへり此哥をとりて續古今集に
雪の後の八かくしほるかめかつまのくまのくもえしぬよしの月かけ
ひなみしのみこの此哥或八ひなめしのみこよみかりや此本の点又安本日並の皇子
なと云り日雙斯皇子命八草壁皇子の御名也或八日並知皇子命ともいへり
御かりちるとは猶小出立事の心也振立たとふくひとこきをしきむかふとも
草壁乃むまし給まひし時八二十ひまゐ向へと草壁八なしまかなまきと哀傷
乃心をふくめりけるとそ

50 藤原宮役民作歌一首 日本紀曰朱
鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地八年甲午春正月幸藤原宮冬十二月庚戌朔乙卯遷居
藤原宮
姓名未詳

藤原宮役民 宮本
ひきはらのみやのえのたみのうたへし
作者姓名未詳とこ
よろこひてすなわち此わくみて
天子八天照太神の流なる
ゆゑ八ひとし高照 日の御子とて
定家の和も本て進る
かくの都にみやこかうへ
仙旨そ八歌といふ云頌

八隅 知之 吾 大 王 高照 定家
日之 皇 子 荒 妙 乃 藤 原 我宇倍爾
食 國 乎 賣之賜 牟登 都宮 者
やすみしるわかおほきみのたかてらす
ひのわかみこはあらたへのふちはらかうへに
をすくにをめしたまはんとみやこには

也　都京ハ神事あるより
ことよくいひて是に甚く
へ給ふの後にされど
給ひつゝ諷詠し甚く多
布なきとも聞えし
ゆるに仙日食國ハおく
ゆ八貢物の多くも
大なり宮居を嶺しし
食國の名あんと名坂
小天地もよりて田上乃
杣木を宇治河に浮（流
すと乃ゆし
いひける行ふ　仙日是
水ハ泡乃木梢なれバ
へ流さき流しみ云ハ
近海に流さるる海なり

高所知武等　たかしらさんと
神長柄　かむながら
所念奈戸二　おもほすなへに
天地毛　あめつちも
縁而有許曽　よりてあれこそ
磐走　いはばしる
淡海乃國之　あふみのくにの
衣手能　ころもでの
田上山之　たなかみやまの
真木佐苦　まきさく
檜乃嬬手乎　ひのつまでを
物乃布能　もののふの
八十氏河爾　やそうぢがはに
玉藻成　たまもなす
浮倍流禮　うかべながせれ
其乎取登　そをとると
散和久御民毛　さわぐみたみも
家忘　いへわすれ
身毛多奈不知　みもたなしらず
鴨自物　かもじもの
水爾浮居而　みづにうきゐて
吾作　わがつくる
日之御門爾　ひのみかどに
不知國　しらぬくに
依巨勢道従　よりこせぢより
我國者　わがくには
常世爾成牟　とこよにならん
圖負留　あやおへる
神龜毛　くすしきかめも
新代登　あらたよと
泉乃河爾　いづみのかはに
持越流　もちこせる
真木乃都麻手乎　まきのつまでを
百不足　ももたらず
五十日太爾作　いかだにつくり
泝須郎牟　のぼすらん
伊蘇波久見者　いそはくみれば
神随爾有之　かみながらならし

れハく家まり乃ことを呼
こハ衣乃袖ハ比上
切れバよりてつくるに祇
田上の丹を見ものあすさ、
一かたより北田上ハ田を〻
乃山なせり
木手にひく乃流まて　仙日檜乃未ハ良木なれハ宮造乃材木に用ひ
られハ杣木乃さいふ杣木と云　こゝ仙覚式説句讀并訓皆誤なり口訣ニ云 解案抄ニ云
もののふ乃やそうぢ川　祇曰もののふ乃矢とハ八十乃氏のすまう宇治川をやそうぢ川と云む
八十氏とハおほく乃人といふ之これ小なむ
玉藻なす　藻ハ水に浮て靡きれハうつひあり乃なりぞれ乃枕詞なりさて
うをとるとも　こゝ流せる材乃木をとるこゝろ　役民乃さわぐ也な
家忘れ身もたな知らずと　しるハ腕治之民乃急ニ民乃身も惜まず勤む也
鴨じもの　仙日しもとしと云ハ羽乃助之集の寄にもてしとみも　ふハ鹿の
すゝ富樫云かゝりとものハ鴨し民乗る浮居ての枕詞なり
いらの四上りこせぢより　仙日此句古点ニハしらてぬ国よりこせぢに寄る
ぬ国いつくなるや甚違之いへのはこしなし　大和ニ磯上郡まよのくに

おかしきのみよいひてるこそいとき彼いろの出むかはこせちらかわ久をてらすかめの
まさしかりとよめるなるへし不知乃字男庵ニハいさ女庵ニハいさといふ
わかくにゝはこと世にあらん　常世ハ蓬萊之島をいへはなりて亀乃
物またしいふみのよし世之蓬萊ニ来ハ亀乃おへる山なれはこ
ふみおへる神亀とよむかの河洛書乃くわしき事也　易繋辞傳云河出圖
聖人則之　孔安國曰河圖者伏羲氏王天下竜馬出河遂則其文以畫
八卦洛書者禹治水時神龜負文而列於背有數至九　仙曰賢王聖
主乃御世にあらはれて神亀出ける事を申けるなり　又我朝にも霊亀
元年八月廿九日左京大夫高田首久比麿献霊亀長七寸闊六寸着頭三公
負北斗七星又天平元年五月十六日京職大夫従三位藤原朝臣麿負圖
亀一頭献上長五寸三分闊四寸五分其背有文云天皇貴平和百年とも
その教へにかなひたる御代なれはかゝる所書載也　仙曰かゝる世をたもつ事を
亀も出まさむとよめるなり
行へき世と　仙曰新代　新都をいはひてよめる詞也　出来泉河大和　出と泉とくいかけ
をこしすいろに　仙曰五十といふとよめるは筏をいさんとて　百不足といふ也
也百にたらさる数にはいつまでかもいへしとこまかのつまれそも此数也

いふくえる八神のまもりしくと　仙曰いふくいふこゝろ神の
なしとハいすゝのとゝめをしてよみてまつるといふ帝を神と申し
志貴皇子　施基皇子同し
皇子のみや天智帝の子光
仁帝の御父田原天皇也
うねめの袖吹かへすとて
けふ凡大和飛鳥に吹
風也　仙曰ハあすの都に
てあり時ハ飛鳥風も
うねめの袖を吹かへし
ける事も今はつれつれき
さうなれハ徒に吹とよみ
埴安乃堤　輿儀八云
うへやまとにも定家は
和名かやまと日本紀三
神武曰天皇以前年秋

従明日香宮遷居藤原宮之後御歌
一首　志貴皇子

婇女乃袖吹反明日香風
うねめのそてふきかへすあすかかせ
京都乎遠見無用爾布久
みやこをとをみいたつらにふく

藤原宮御井歌一首并短歌
作者未詳

八隅知之和期大王高照
やすみしゝわかおほきみのたかてらす
日之皇子麁妙乃藤井我原爾
ひのみこのあらたへのふちゐかはらに
大御門始賜而埴安乃
おほみかとはしめたまひてはにやすの

九月潜ニ取天香山之
埴ヲ以テ造ニ八十平瓮ヲ
躬自齋戒祭ニ諸神ヲ遂ニ
得ニ安定区宇ヲ故号ニ取ル
土之處ヲ曰ニ埴安ト
ありしところなれハ
なるへしとなへそし
あめのかく山 八雲抄ニ大和
又安云かく山のまへくと見
ゆるく
ひのたて 又安云東西
ひのぬき南北也 仙曰ひ
のたてのおほみかともと
東の門 東ハ春を司れハ
春の山路としみさひ立
てとつけたるとそ見の

大御門とハ皇居の門にある
事なり 新考乃大御門ハ
南大門と初乃二つを
日の経緯をもて方角を
わけしもわけの二つを
かさねく山の陰陽を
おくハせるも日本紀七成
務天皇五年秋九月令

堤上尓在立之見之賜者
つゝみのうへにありたゝしみしたまへれハ
日本乃青香具山者日経乃
やまとのあをかくやまハひのたての
大御門尓春山路之美佐備
おほみかとにはるやまとしみさひ
立有畝火乃此美豆山者
たてりうねひのこのみつやまハ
日緯能大御門尓弥豆山跡山佐備伊座
ひのぬきのおほみかとにみつやまとやまさひいます
山佐備伊座耳高之青菅山者
やまさひいますみゝなしのあをすかやまハ
背友乃大御門尓宜名倍
そとものおほみかとによろしなへ
神佐備立有名細吉野乃山者
かみさひたてりなくはしきよしのゝやまハ
影友乃大御門従雲居尓曽
かけとものおほみかとゆくもゐにそ
遠久有家留高知也天之
とほくありけるたかしるやあめの

御蔭天知也日御影乃
みかけあめしるやひのみかけの
水許曽婆常爾有米御井之清水
みつこそハつねにあらめみゐのましみつ

反歌

藤原之大宮都加倍安礼衝哉
ふちはらのおほみやつかへあれつかんや
處女之友者乏吉呂賀聞
をとめかともハしきろかも

諸國ニ以國郡ニ立造長ヲ縣邑ニ置稲置ヲ並賜楯矛ヲ以為表則隔山河而分國縣ヲ隨阡陌以定邑
里ヲ以東西ヲ為日縦ト以南北為日横ト山陽曰影面山陰曰背面是以百姓安
居天下無事 略 東をみまいハ宋葉云たけきなき
うねひのこのみつ山 うねひ山をみつ山と云 略 すゝの
あをすけ山ハ八雲抄大和ニ よろしなへ よろしく名にしおへるの吉
よしのゝ山 仙曰 よくきゝとのの新もちうろひ名のみ
まもる大乃みけ 仙曰 まもる中くの新もちうろひ名にまつ
あめの新もちうろそるよにこまそふ所をしてよめるき

みちりしるおかりけりやらん、このよせんやハ稱せんて仙日之吉呂賀閑ニテリソメスカモト点ス
千手陀羅尼ニ悉吉多伊蒙ニよめる吉乃字ちとゑと同韻相通すれハ
也吾兼乙女なハこまりて召されハ我もめされてこそ侍らんとこ古点口決
大寳元年　文武帝年号
持統天皇也こゝにいふ太
上天皇ハ持統なるの
注乃誤也
こせ山乃つらつら椿
巨勢山　奥儀抄大和ニこ
れ日本をつらつらこゝろ
也同しけれねつき皆伊禅
抄日つらつら椿列々と
かゝりつらつらなる椿と
いふ也本草ニ女貞ツラツバキ
ことよむ也をはやして
よめるなつらつらとこふ

大寳元年辛丑秋九月太上天皇持統天皇幸ニ紀伊國ニ時歌二首
也太上天皇尊号從此始

坂門人足

巨勢山乃列々椿都良都良尓見乍思奈許湍乃春野乎
こせ山乃つらつらつはきつらつらにみつゝおもふなこせのはる野を

一云春日藏首老カスカノクラヒトオユ
河上乃列々椿都良都良尓雖見安可受巨勢能春野者
かはかみのつらつらつはきつらつらにみれともあかすこせのはるのは

調首淡海ツキノオビトアフミ

謂ふなるへし一云寄月
あさもよひきひと
言塵集云あさもよひ
さしきまり日まと定家
説ニハあさもよひとハきこえけんさめし朝乃食をする爲の氣ニ云氣ハ煙也をと言塵
袖中抄曰万葉五巻掛序ニ同式部卿石川卿説ニ云朝炊飯謂之朝毛吉也紀ハ薪タキヽ也以燎之炊飯因是將ニ紀伊國ニ發言以爲朝毛吉耳ト
奥儀抄　木人ハ紀伊人也亦打山ハ紀伊ノ集ニ麻裳吉木道尓入立真土山
ともいへり又あさもよしとハ面白といふ心にてまつちとゆくといへる
にてあるをおもすへて紀伊の人乃おもしろき心ちするとし仙覚ハ木人ハ樵
夫なとも心得なるも紀伊の國の事なれはあるへし

朝毛吉木人乏母亦打山行來跡見良武樹人友師母
あさもよひきひとともしもまつち山ゆきくとみらんきひとともしも

ひくまのにゝほふはきはら
仙日引馬野　三河ノ
也東海道也ともいふ
萩の入るなれまゝある
白くなれハいかに榛衣

大寳二年壬寅太上天皇幸ニ參河國ニ時歌五首
長忌寸奥麻呂ナガノイミキオキマロ

引馬野尓仁保布榛原入亂
ひくまのにほふはきはらいりみたれ

うつり色ハ榛引乃奥あ
れなりとし
いづこにかふなはてすらん
又安云やすらひて舟をと
ゞむる也 仙曰阿礼乃さき
ハ三河国にあり こぎゆきしハ
こぎめぐりゆきし也 棚無
小舟とハちいさき舟にハ棚
をせねハ也
ながらふるハ流ゆく風
仙曰ながらふる妻とハ夜の
衣をかさねてねると
る妻を吹風と云き
夜よわがせの君ハ独り
ねやらんといたくお
もひやりてよめるなし

ころもにほはせたびのしるしに
衣爾保波勢多鼻能知師尓

高市連黒人

何所爾可船泊為良武安礼乃埼
いづこにかふなはてすらんあれのさき
榜多味行之棚無小舟
こぎたみゆきしたなゝしをぶね

誉謝女王（ヨサ）

流經妻吹風之寒夜爾
ながらふるつまふくかぜのさむきよに
吾勢能君者獨香宿良武
わがせのきみはひとりかねらん

長皇子御歌 天武皇子

暮相而朝面無美隠爾加
よひにあひてあしたおもなみよなばりにか
氣長妹之廬利為里計武
けながきいもがいほりせりけん

祇 夜乃衣をかさねてこゝろよくねたるよすらさむきなと わがせこもぬれハ
ひとりねる妻とよめる也 此ハ夜の風さむきの君にそへて吹時わがせこを
おもひやりてよめる哥也 万葉日本紀一云 吾夫君（アガナセ） 此云阿我儺勢（アガナセ）
よひにあひて 仙曰此哥 古點ニハよひにあひて あしたおもなみ
りと点ス 此集ニハ暮にあひてあしたおもなみと云つるかそれの 此二首と云よし
てよひ合すれハ隠ノ野を伊勢ノ隠ノ野ともあさもよひとおもひしに
点ヲとへしけながき妹とハ あけきといふとけながきと云しおもをゑく
ハ集乃ながく流るゝといふことをもいふなり いかりぞかくと いふをかくるもと
云しありとハねの不詳なく おりなしとはかるとし 又安云女ハよいてより
人に逢て朝乃顔を人に見せぬ事をまうす也 万葉古点乃おもなみハ面目なき
やうに恥かしき心也 互に女ひとりて打まうくり あり
ねゝ之 仙点ハさらにみかくれみのといふし ぬかなしとハ恥る
ところ也 隠れなハかくれるかといふにや 大やう古点乃点ぞハ可なる也
ますらをともやしハさみ
童蒙抄云 ことも失とハ猶
小おもる矢をいふ也得

従駕作歌 舎人娘子（トネリノイラツメ）

大夫之得物矢手挿立向
ますらをのさつやたばさみたちむかひ

物矢と云ることハさらなるハ
二ツと三ツとをたえさる事
てはなれぬなれハ御中なる首
万葉にもさそやとハ弓なる
小二人立向ひてぬるなり
矢を小指にさしてかなる
ことさきに矢をとる矢とも云
仙用之 仙臼圓形浦 伊勢
也風土記曰的形浦者此
浦地形似的故以為號
也今已跡絶成江湖也
景行天皇歌曰まとすかのさ
川矢とさしきよみむかひなるかなるやすと切ってそれさ取けさいなれなけ浮
御うらかなれ上仙乃ゐ東上句ハ的形をいへん序に明らかに白さ也
國史曰 三野連名をうしなへれハ國史に美奴連岡麻呂と注スや
何とねよし作れ 又安云在根良ハ嶺乃白さに對する子の

いるまとかたハみるにさやけし
射流圓方者見爾清潔之

三野連闕名入唐時作歌一首 國史曰大寶元年正月遣唐使民部卿粟田真人朝臣以下百六十人乘船五雙小商監從七位下中宮小進美奴連岡麻呂云云

春日藏首老

ありねよしつしまのわたりわたなかにぬさとりむけてはやかへりこね
在根良對馬渡渡中爾幣取向而早還許年

よきこのさなるハ海中にぬさとりむけてハ幣元よ向てと舟乃揺するに
奉事乃神より向ひるる土を日記おもしろく海路のやすからむを祈る
心にて子なとにいふ事なれと
遣唐使 唐へまかる使
大使副使判官主典なと
いさこともやいのとくへ
みな子ハ人をいさなひて云
詞にて大伴の三津ハ摂
津国の名所なるを
待恋ぬらん乃枕詞
りなとにいふねらの人に
待らんふみく日本の
ゆんとのやしは待ハ
新古今集に入
うつつゆ鴨のねらひ
やまとしまとハ旅路の

在大唐時憶本郷作歌一首 大寶元年遣唐使粟田真人高橋笠間等 上云憶良在其中歟慶雲元年七月歸朝

山上憶良

いさこともはやひのもとへおほとものみつのはままつまちこひぬらん
去來子等早日本邊大伴乃御津乃濱松待戀奴良武

慶雲三年丙午幸難波宮時

御作歌二首

志貴皇子

葦邊行鴨之羽我比尓霜零而寒暮夕和之所念

あしべゆくかものはがひにしもふりて
さむきゆふべはやまとしおもほゆ

おぼえとよひたかへりや
旅日にあそびたまさびて
おもふてそふ
思ひやることとどまる之

長皇子

霰打(仙あられ)安良礼松原住吉之(仙のえ)弟日娘(仙をとめ)與見礼常不飽香聞

あられうつあられまつばらすみのえの
おとひをとめとみれどあかぬかも

おとひむすめハをとむすめ也ひハ助字き

あられうつあられまつの
仙覚本古点ニハあられ
うつあられ松原住よしの
おとひむすめとよめり
霰ハあられことよりある
訓ミ玉篇云霰思見切暴雪 東宮切韻曰霰雨雪雜下也下略さては本訓なり
但公任て朗詠集にはあられに用ひる今の哥霰を打とよめる
(さて住吉摂津風土記日本名沼名椋之長岡之國今俗略之直称須美乃叡
乃叡ニ)娘乃字をとめとよむ常のすこしを上仙覚本霰の字頭和名みそ
出てよめり李束訓するハ公任て朗詠に用ひて打の字の西の
かるをも云あをそれるかるに吹んとす志りる也住吉風土記にはすみの
江と伝れども歌にハ世あるより古今集すみよしとよめる

也偏すみのえを本ハあすす娘乃字あ訓をハ古ゑとのあし且又みられ
かる伝れ松原古今かのみきる行りハ也おふも伝れ松原住よしみれ路
こふるのをせよかり哥乃四ハ彼住吉乃娘子とともに此松原を霰かる
比見れどもあかすとなり也娘子乃かれる所にに元分ひて此味

太上天皇幸二難波宮一時歌四首

置始東人(ヲキソメノアヅマヒト)

大伴乃高師能濱乃松之根乎枕宿(イねぬ)杼家之所偲由(仙しのはゆ)

おほとものたかしのはまのまつがねを
まくらきぬれどいへししのばゆ

太上天皇 元正天皇也
おほとものたかしの田
枕宿杼古点まくらねぬれど
旅日ニ高師乃濱ハ泉の池之
大伴乃高師の濱松雪
白し松ヶ根を枕かて
ぬれど旅古ての意まきと
よめるは仙覚松がねを枕
まくらきぬる也ハ家を思
ふるれハ枕にねむく和ス
しのびておもひやるの
おもひしきに略さる

高安大嶋

旅爾之而物戀之伎乃鳴事毛不所聞有世者孤悲而死萬思

たびにしてものこひしぎのなくこゑも
きこえざりせばこひてしなまし

身人部王(ミトベノオホキミ)

てるはしに對すれは並
死ぬへしとし
おほともの三津の為
紙日忘れてをふやとは
ことは乃深まけるとい
へと家なける妹をいう
て忘ねうとあさしやは
とかめるやし仙覚
れでをへやは序哥訓
なもてこして多を濁以て読む月

大伴乃御津能濱爾有忘貝家爾有妹乎忘而念哉
おほともの三津のはまなるわすれかいいへなるいもをわすれておもへや

進長皇子歌
清江娘子

草枕客去君跡知麻世婆岸之埴布爾仁寶播散麻思乎
草まくらたひゆくきみとしりませはきしのはにふににほはさましを

草まくら旅ゆく　草枕は旅乃枕詞と云ひまをせいて知よしの之尾掛云
あるは黄土也云ことまし乃あるかは住吉乃岸の土地をいふなるや　ふ
有ることはおそふ成し此集にはすみのえ此吉屋子かく旅云ひさて
ありまきさあるは岸乃土地白きは赤きにて擬えしめてと暫やてめんさと
清江娘子　すみの江乃垣とめてよむへし住吉は住る故りくいみえるをも
おほを皇子乃寰なる行れよまつとよみなまてしけ此娘子はゆくりや

やすしかは爭きて
仙日吉野の山中にきさ
山とりふるに八尾おふ
象中山さき山そしふ
鳴くらうんいまく
なまやんのまし
大行天皇　仙日文武也
聖武乃父大王なる
うりとこわうはさんと女ふ
大行乃称は仙お云諸説
やまとこいのあれぬ
学さ雅たと云してね
られ京鶴の邊り
いとねうきさを恨て
切て下らく鳴まする
りつとしては雞鳴と云

太上天皇幸吉野宮時作歌一首
高市連黒人

倭爾者鳴而歟来良武呼兒鳥象乃中山呼曽越奈流
やまとにはなきてかくらんよふことりきさのなかやまよひそこゆなる

大行天皇幸干難波宮時歌三首
忍坂部乙麻呂

倭戀寐之不所宿爾情無此渚崎爾多津鳴倍思哉
やまとこいのねられぬなるにこころなくこのすさきまにたつなくへしや

式部卿藤原宇合

玉藻苅奥敝波不榜敷郊之比等不男
たまもかるおきへはこかしきへつのこのまきの

ことはりなるはかまへたり
是もしるしの妹をなりよ
みな遠の時へは舟出せしが
とよめるにや 枕之邊人(まくらのあたり)
まくらせし人とよむもを
奥儀抄に家郷はかゝる所
のあるをいふまさるへとかに
さくといふ心也や 王葉姿
我もこをとはやし濱風
早見濱 見安さも恋也
或説能は或ハ近江にて
吾妹をまたんとのわ
妹をまんとも濱風
あまりは姫の我をまつれ
椿(ツバキ)をまつれよとし
みよしの山あらしの

枕之邊人志可祢津藻
まくらのあたりわすれかねつも

長皇子

吾妹子乎早見濱風倭有
わきもこをはやみはまかせやまとなる
吾松椿不吹有勿勤
われまつつばきふかさるなゆめ

幸于吉野宮時歌二首

大行天皇御製

見吉野乃山下風之寒久尓
みよしのゝやまのあらしのさむけくに
為當也
はたやこよひもわれひとりねん

長屋王

宇治間山朝風寒之旅尓師手
うちまやまあさかせさむしたひにして

きるにはやこそとあり
といふよ愛のなき
旅日旅の心也
うちまやまあさかせの
宇治間山 仙覚大和也
似たるは長屋王は高市
皇子の息男也 佐保大臣と
号も吉野に在る時の哥也

衣應借妹毛有勿久爾
ころもかすへきいもゝあらなくに

和銅元年戊申

天皇御製 元明天皇
一首

大夫之鞆乃音為奈利物部乃大臣楯立良思母
ますらおのとものおとすなりものゝふのおほまうちきみたてたつらしも

古来風体に女帝の御哥は殊にめでたく見ゆとあり
ますらおのとも乃よくねりたる時もあるにねきさす 物遠之鞆
又安云とも八革をよくぬりかためて
へうふくし日本記 臂著稜威之高鞆とある物也 頌和名に鞆の字をとも
とも也よむ日本紀にも鞆の字を用 在臂避弦具也 臂鞆
以朱革為之とあり此字のことは弦の音を弓の心の頌
元明天皇和銅元年乃比は國家大平にて弓矢を動かさぬ
軍事なしといふも文武崩御のゝち聖武はおさなくおはし
まし文武の母君として位につき給へはやすからぬ御事を

これのなす流ゆれどもこらりんことをこばれなしさわりんはなよのやうに
よませまるちよ／し　續日本記曰和銅元年正月武蔵國秩父郡よ
り洞をきりし時の詔ニモ挾蔵軍器百日不首服罪如初とあるを
ためらしこそかうるも
わが君も物をあわりら
すめ神々は皇神之天
照皇大神をさせと
こいなをよんをとらず
中あるやわが大君の
み危く思おう御徳
物かりて皇神の譲り
嗣せまいらせまいし此
位をうわか吾のが我
らに嗣くまつるにい
あしますと歴めし亡
和銅　續日本紀四三月辛酉ニと

奉和御歌一首　御名部皇女　天智皇女母ハ石川麿大臣女

吾大王物莫御念須賣神乃嗣而賜流吾莫勿久尓

わが君もものなおもほしすめらぎの
つぎてたまへるわれなけなくに

和銅三年庚戌春三月従藤原宮遷寧樂宮時停御輿長屋原逈望古郷御歌一首

太上天皇御製

とぶとりのあすかれ
新古今東野見擬云飛鳥り
こはあすかのこといふん擬都
しまたがわのこにてたふ武
ておこか陵乃まし彼
陵に流る水を勝てさ経
て経する御制之除
限なさきまことく
後世をまていなしにとよ
おくのみたをおもへる奉納
其今にる王所其乃
あすかを置ていなとる
みし君かあかりをと
りはりんとゆくする
日本紀續日本紀三文武
天皇ヲ治ヲ於飛鳥岡奉ル

飛鳥明日香能里乎置而伊奈婆君之當者不所見香聞安良武

とぶとりのあすかのさとをおきていなば
きみがあたりはみえずかもあらん

一云 君之當乎不見而香毛安良牟

君があたりを見ずてかもあらん

従藤原宮遷寧樂宮時歌一首并短歌　作者不知

天皇乃御命畏美柔備尓之家乎擇隱國乃泊瀬乃川尓艇浮而吾行河乃川隈之八十阿不落万段顧為作玉鉾乃道行晩

すめらぎのみことかしこみにきびにし
いへをえらびてこもりくのはつせの
かはにふねうけてわがゆくかはの
川くまのやそくまおちずよろづたび
かへりみしつつたまぼこのみちゆきくらし

葬於檜隈安古山陵こと
みえたるに　元明天皇の
詔令をくたし給へり
續日本紀四曰和銅元年
二月戊寅詔曰上略方今
平城之地四禽叶圖三山
作鎮亀筮並從宜建都
邑宜其營構下略これは
遷都の御命也

あをによし　ならのみやこの　さほかはに
（青丹吉　楢乃京師乃佐保川尓）
いゆきいたりて　わかねたる　ころものうへゆ
（伊去至而我宿有衣乃上従）
あさつくよ　さやかにみれは　たへのほに
（朝月夜清尓見者栲乃穂尓）
よるのしもふり　いはとこと　かはのひこほり
（夜之霜落磐床等川之氷凝）
さゆるよを　やすむこともなく　かよひつゝ
（冷夜乎息言無通乍）
つくれるいへに　ちよまてに　きませおほきみ
（作家尓千代二手来座）
おほきみと　われもかよはん
（多公與吾毛通武）

にきひにし　柔備　尓之
にきひつるといふ語也
いへをえらひ　故京の故
京に住なれし家をすてゝ擇ひ出て新都へうつりたまふ成へし
川くまは　見安云河のまかりたる所也　萬段やよろつたひかへりみしつゝの意也
川くまことに故京の名残をおしみたまへるなり
わかねたる衣の上ゆ　新京乃やまと家もとの所にてねたる衣に月の移る也

あさつくよ　朝月夜　見安云ありあけと云是也　夕月夜に係て出る月也
たへのほに　栲乃穂　仙曰たへはかゝる語也　見安云うつくしくかゝりたる也
栲穂とは栲のかゝりたるをたへにたとへて人をとなりたらんとよめり
いしされはたへのほとはたへの白きをいふ也
萬葉集十三にたへのほに麻きぬきたるとよめるは白き衣裳也見合て解へし
いはとこと川のひこりて　仙曰川の水の岩床のやうにかたまるといふ也
かはのひこほり　見安云ひこほりてはこほりのこと也
ちくれる家にちよまてもかよはんと君を待つゝ我もかよはんとなるへし
とかくれ君を千代まてと祝ひ奉りたるの歌也

反歌
あをによし　ならのいへには　よろつよに
（青丹吉寧樂乃家尓者萬代尓）
われもかよはん　わするとおもふな
（吾母将通忘跡念勿）

宮家にはならの都は和しき本のかつかぬや
すの心はならのあたりに住世にてこもさかえん君と我をとかけてよめるなり

和銅五年壬子夏四月遣伊勢
齋宮時山邊御井作歌三首
遣伊勢齋宮遣長田王

砌ニ御井ニ所作　疑當時吟詠古歌歟

長田王

山邊乃御井乎見我弖利神風乃

伊勢處女等相見鶴鴨

やまのへのみゐをみかてりかみかせの

いせのをとめらあひみつるかも

伊勢齋宮ニ時とゝこと

下二首　此三首乃うち乃

うらさふるこゝろさまねと

わたつみの沖つ白浪を

よめる二首なりまし

やまのへ乃みゐを

凡安云山邊御井伊勢之

玉葉ア乃て乃り八尺乃てしく山井をみてしく伊勢乃をとめもみつるかもとさし

神風乃いせと云事　仙抄　伊勢風土記をひきて云伊勢は常世乃神風吹

天皇ヨ伊勢乃国をまつりてたまはんと天日別命に問ひける詞に云吾

以今夜起八風吹海水乘波浪將東入此則吾之却由也天日別命懿

兵窺之比及中夜大風四方起扇擧波瀾光耀如日陸國海共朗遂

乘波而東焉古語ニ云神風伊勢國常世浪寄國者蓋此謂之也

風土記ニ見記

浦佐夫流情佐麻弥之久堅乃

天之四具礼能流相見者

うらさふるこゝろさまねしひさかたの

あまのしくれのなかれあふみれは

うらさふるこゝろさ

仙曰うらさふるハさひしき

ことなり　心さまねしハ

さひしき心のまさる事也　あまのしくれのなかれ

あふとハしくれのしきりにふる也

心さまねしハ心のまかれ也

海底奥津白浪立田山

何時鹿越奈武妹之當見武

わたのそこおきつしらなみたつたやま

いつかこえなんいもかあたりみん

わたのそこ乃おきつ白浪とハ

龍田山と云ハんとて沖津白浪とハ沖津

なりとそ云るんとてわたのそこ乃ちゝよりふかき何ぬのゝ

衣乃うらしきれハ此歌をとりて能因法師ハ彼沖津しら浪をつゝ

山をまたわたる乃あとも人なしとハいへるうたや

立田山を越えゆかん妹かあたりをいつかゝ見んと云ハ

玉葉なるハこれハ立田山をこえつゝゆくと云ハ我が妹のあたりを

ことハり此歌乃わたの底海底乃字を仙覚点すへしと

しとゝつ不審し二條家六條家とものいへり

歌こそ古今和歌集の詞書にも此歌をひきて

きみか乃うなれの沖つ白浪の立田山夜半にや君かひとりこゆらん

此仙覚の點にそひて

寧樂宮長皇子與志貴皇子宴佐紀宮歌一首

長皇子

秋去者今毛見如妻戀爾
鹿将鳴山曽高野原之宇倍

秋されハいまもみることつまこひよ
志かなかんやまそたかのはらのうへ

秋されハいまもみることと
或本秋さらハと和す
むかし丸八宅ほにむ
宮野原太和鹿なく
山のすそしとうさ山
哥のうち也秋来
らハ山野の上に鹿鳴
へき山の面白さ今
もみるごとくなりや
らまくとし

萬葉集巻第一終

天和二年壬戌陽月朔日註解而同十八日終此一巻　季吟

貞享元年甲子五月十一日重而染筆六月朔日終此巻　墨付五十二枚